

バロックとはバラックなり — 高階秀爾『バロックの光と影』 —

バロックというと、故黒川紀章さんが女優の奥様(若尾文子)の美しさをそう表現したとか*1。私はバロックというとアルビノーニやヴィバルディの典雅な音楽を連想するが、絵画・建築・音楽・風俗でそれぞれ多様な定義がされ、よく分からない。今回は先日物故された西洋美術史泰斗によるバロック美術史を紹介したい。(菊地実)

歪んだ真珠

私事だが、高階先生の本にはお世話になった。三十数年前突然美術学校講師になって、遅まきながら『名画を見る眼』(岩波新書)を慌てて紐解き、古典・バロック・オランダ絵画・ロココと西洋美術史をインスタント勉強。映画もこうした美術に影響を受けていることを知った。ただ文学文化史では、バロックはあまり高い評価ではなかった気がする。

バロックとは「歪んだ真珠」を意味し、「不規則、風変わり、不均等」(仏アカデミー辞書1740年版 34-35頁)というニュアンスで、十九世紀まで評価は低かった*2。それはバランスの取れたルネッサンス古典主義があまりにも成功し過ぎたからかもしれない。ニーチェはバロックを「退廃の美術」と批判している(尤もこの人のセンスも信じがたいが…)。

大著『近代文化史』(原著1927年・みすず書房1987年)を著したフリーデルも、バロックにはやや批判的な論調。「ロックとロココ」では前期バロック時代を三十年戦争から七年戦争の間としている。これによると1680-1750年くらいになるが、哲学・文学・美術・音楽では時間的差異の他に、地域的な違いが大きい。同じくドイツ文学者池内紀もフリーデルを踏まえ、不自然な踊りメヌエットをバロックの代表的流行として挙げている(『ウィーン』美術出版社1973年)。

バロック時代17-18世紀前半は、西欧で煙草・珈琲・



※表紙:ベラスケス「皇太子バルタサル・カルロスの騎馬像」
＜講談社学術文庫＞

鬘が大流行した時代である。

見世物としてのバロック美術

本書は冒頭(序章)の「2. 大衆性と祝祭性」(18頁)で、とある美術史家の「バロック芸術＝ハリウッド映画説」(「ものしい舞台装置を飾り立て、壮大な仕掛けと大がかりなスペクタクル」)を引用している(図表1)。

幾何学的で静謐な古典主義とバロックの間には、あのヘンテコな「マニエリスム」(マンネリズム)様式がある。社会的には新教とそれに対するカトリック教会の宗教改革(代表的なものはイエズス会)の中で、光と影を生かした自然主義・写実主義(レンブラントに代表されるオランダ絵画)が生まれた。

二十世紀に入って、バロック復権を象徴したのは「スペインのミケランジェロ」と歌われたチュリゲラで、サラマ

ンカ^{*3}にあるサン・エステバン教会聖堂・祭壇は「驚くべき豊穡な装飾性」(154頁)で、これはメキシコなど南米教会に受け継がれていく。ティツィアーノ、ベラスケスといったスペイン画家の皇帝・皇太子騎馬像はダイナミックなスピード感を表現している。本書表紙の絵画については、「馬の姿を真横から捉えるのではなく・・・完璧な短縮法表現によって、風の唸りを感じさせるほど、見事に、スピード感を定着させる」(169頁)とベラスケスの天才ぶりを絶賛している。

バロック代表としてのベルニーニ

バロック美術の代表を一人選ぶとしたら、ローマで活躍した建築家・彫刻家ベルニーニ(1598-1680年)であろう。英国ケネス・クラーク卿『芸術と文明』の中で、バロックをベルニーニに代表させ、サン・ピエトロ大聖堂の天蓋(1624-1633年)とローマのナヴォーナ広場にある四大河の噴水(1648-1651年)を語っていた。噴水については「ナイル、ドナウ、ガンジス、ラプラタ四つの川は世界で^{*4}・・・ベルニーニ得意の人目を驚かさず演出効果が見事に決まっている」(162頁)としている。真打はローマのボルゲーゼ美術館にある彫刻「アポロンとダフネ」(1622-23年)。アポロン神に追いかけられたニンフのダフネが植物に変わろうとする瞬間を見事に表現している。現在最も人気がある作品である。

バロック以降

美術のバロック様式は可愛らしいロココ絵画に。この様式はフランスが中心で、建築を見ると仏・独では差異がある。

また十九世紀の新古典派のアングルとロマン派のドラクロアもバロックの一変種だそうで、これについてはドールスを引用している。

碩学の手による内容だけに、近代西洋美術史として

<図表1>本書の目次

序章	バロックと現代
	1. 巨大な文化複合施設 2. 大衆性と祝祭性 3. グローバル化への志向
第1章	歪んだ真珠——バロックとは何か
第2章	静謐な形態感覚——古典主義
第3章	不安の幻想と綺想の魅惑——マニエリスム
第4章	大衆教化のイメージ戦略——対抗宗教改革
第5章	真実追求の精神——自然主義
第6章	強烈な演出効果——光と闇
第7章	溢れ出るダイナミズム——装飾と動勢
	1. 呪われた建築家 2. 服飾のダイナミズム 3. 水と広場の役割 4. 浮遊する室内装飾 5. スピード感の表現
第8章	二重構造の世界——写実性と超越性
第9章	肉体の悲哀と魂の歓喜——苦悩と法悦
第10章	貴族となった芸術家——宮廷絵画
第11章	新しいパトロンたち——市民絵画
第12章	拡大する空間意識——都市と建築
第13章	夢の祝祭世界——文学・音楽・演劇
第14章	生きる歓びの表現——ロココの美術
第15章	永遠のバロック——新古典派とロマン派

(本書より)

詳細な記述で大変に勉強になる。「安定した秩序への志向が人間精神の本質的な一面であると同様に、変化と破壊への衝動もまた人間の中に存在している」(317頁)とバロックを定義している。

私は劇場的なローマ市街やベルニーニ、あるいはウイーンのベルヴェデーレ宮殿・美術史美術館を連想するのだが…。

*1:「インテリジェントビル研究会」(電通)に来られる黒川紀章さんは、いつも香水の香りがした。これを奥様がかけているのかと連想した。もっともバロックが歪んだ真珠なら大変だ!

*2:馬が疾走する時の足は、美術では論議が多い。十九世紀末写真銃による連続写真で、馬の足は地上から離れることが分かった。写真・映画の誕生である。

*3:スペイン中西部カスティリヤ・イ・レオン州の都市。旧市街は世界遺産。

*4:十七世紀ローマ人の世界観が分かる。ここにはミシシッピ・アマゾン・揚子江が入っていない。

■筆者/ 高階秀爾(タカシナ・シュウジ)1932-2024年、東京大学名誉教授。日本を代表する西洋美術史研究者。著者多数。

■書誌/ 原本は2001年小学館から刊行。増補加筆し、2017年講談社学術文庫より発行。A6判・344頁。